

サッカーワールドカップで見た日本人の一体感の歴史と日本の神々

1 ブラジルワールドカップで見た日本人の「和」の心

6 月 12 日からサッカーのワールドカップが始まりました。各国の最高峰の選手が、しのぎを削って、同じルールの中において世界の頂点を目指して戦う姿は、非常にさわやかですがすがしいものですね。当然に勝負であるから勝ち負けがあり、それがはっきりしてしまいます。しかし、逆に勝っても負けても相手の健闘をたたえるというのは、国際的なスポーツの世界で一般的に行われる内容ではないかと思うのです。

日本ではスポーツマンシップということを非常に重視します。スポーツマンシップというのは、「正々堂々と全力を尽くして競技するスポーツマンとしての態度・精神」という意味であり、常に正々堂々と戦う姿、そして力の限りを尽くしてその結果を受け止める姿に、日本人は感動します。逆に、それだけに誤審やスポーツマンシップに悖るラフプレーなどがあったり、あるいは相手チームのサポーターなどで相手国を誹謗中傷するような応援があると、非常に残念です。日本人は、その選手だけでなく、観客として見る日本人もすべてがスポーツの観戦ということに関しては「スポーツマンシップ」を非常に重要視します。そのために、観客や応援をする側のマナーや礼儀正しさなども非常に重要視します。

6 月 15 日に行われたブラジルワールドカップの日本の初戦、コートジボワールとの戦いで、日本は 2-1 で惜敗しましたが、観客は、そのあとスタンドのごみを片付けて帰ったということで、各国のメディアが称賛していました。

日本のこのような行為が世界で称賛されるのは、東日本大震災の後の秩序だった被災地の様子とき以来でしょうか。日本人としては「常識」とされることが、実は世界各国から見ると素晴らしいこととなっているようです。

このようなことも、日本人が「選手と一体になってスポーツマンシップを大切にすること」が言えるのではないのでしょうか。それだから「自分のできることを行う」ということが一つの大きな行動規範になっているのではないかと考えられるんですね。その行為が全体の一体感を表すこととなります。

この一体感を示す言葉が日本にはたくさんありますね。

「和」「絆」「間」というように人と人の関係を示す漢字が多数あり、それぞれに非常に大切な意味を持っているんです。そして、日本は、その多くの人が集団になってまとまって大きな力になることを最もよく知っていた、そんな国なんです。

今回は、その日本人の特性について少し考えてみましょう。

2 「日の本」という言葉と聖徳太子

日本で一番初めに「和」を解いた人といえば、聖徳太子が思い浮かぶのではないのでしょうか。聖徳太子の残した「十七条憲法」は、様々な説があることは認識していますが、やはり、聖徳太子という実在の人物が、日本の政治のために作ったものであるということが言えます。

『日本書紀』、『先代旧事本紀』には、推古天皇12年4月3日（西暦604年5月6日）の条に「十二年…夏四月丙寅朔 戊辰 皇太子親筆作憲法十七條」と記述されており、『日本書紀』には全17条が記述されています。この「皇太子」こそ「聖徳太子」とされているんですね。

「一日、以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨。亦少達者。以是、或不順君父。乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通。何事不成。」

日本書紀にある第一条はこのように書いてあります。書き下し文にすると「一に曰く、和を以て貴しと爲し、忤ふること無きを宗とせよ。人皆党有り、また達れる者は少なし。或いは君父に順ず、乍隣里に違ふ。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論うに諧うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。」

そして現代語に訳すと「一にいう。和をなによりも大切なものとし、いさかいをおこさぬことを根本としなさい。人はグループをつくりたがり、悟りきった人格者は少ない。それだから、君主や父親のいうことにしたがわなかったり、近隣の人たちともうまくいかない。しかし上の者も下の者も協調・親睦の気持ちをもって論議するなら、おのずからものごとの道理にかなひ、どんなことも成就するものだ。」

このように書いてあります。

このように、聖徳太子は「和」が最も重要なことであるというように、憲法の一番最初にそのことを書いているんですね。「和」とは人と人とが結びつき一体感を持つこととされ、その反対側の概念が「いさかいをおこすこと」とされ、それをきつく戒めています。そして「協調・親睦の気持ちをもって論議する」ことの重要性を言っているのです。

一体感を持ち、協調性を発揮することが日本の基本であるということは、聖徳太子の時代にすでに最も重要視されていたことなんです。

その「和」という言葉、この重要性は日本人は現代でも重要視していますね。そう、今では「和」というと日本のことを意味します。「和食」「和風」というのは、すべて日本のことであり、その日本であるということが、そのまま「協調性を持った国」ということを示しているのです。

この「和」という言葉は「わ」と発音します。日本が中国の文献に初めて出てくるのが「漢書地理誌」で「楽浪海中に倭人あり、分ちて百余国と爲し、歳時をもつて来たりて献見す

と云ふ。」と書いています。日本のことを「倭」と書いていますね。これは中国特有の差別用語で「倭」は「委（ゆだねる）」に人が加わった字形です。解字は「ゆだねしたがう」「柔順なさま」「つつしむさま」、また「うねって遠いさま」という意味で、この漢字は「中国に従っていなければならない国」というような意味でこの漢字を使っています。当時、中国は中華思想が強く、四方を「南蛮」「西戎」「北狄」「東夷」というように賤しく知的な生き物ではない野蛮な民俗に囲まれて、中国が宇宙の中心であり、その文化・思想が神聖なものであると自負する考え方です。その中で中国に従う国々は、まだ中国に近い考え方があるとして中国が保護するというような思想になっています。そのために「中国に従う国」「中国に従うことによってしか存在しない国」というような意味で「倭」という単語を使ったのです。

後に、大和朝廷と名乗るようになってからは「倭」に「やまと」という音を当てることもありますが、いずれも、中華思想の中の漢字表現であるということになりますね。しかし、それまでは「わ」という単語を使っていたのです。

さて、大和言葉で「わ」というのは「国」という意味になります。もちろん、この「国」は現在のような「国家」というような厳格なものではなく、神社を中心にした地縁的な結合という感じで、一つの集落というような感じではないでしょうか。現代の歴史の知識から考えれば、ギリシアのポリス国家のようなそのような「国」という単語を考えていただければ最も良いのかもしれませんが。これは、神社を中心にして人や家が「輪」になります。その「輪」が重なって「環」になることによって、より大きなつながりを持つことになります。そして、その「環」の中で「和」が保たれることによって、一つのまとまり、ちょうど「国」という集団ができるのです。

日本には、この当時「漢字」というものはありませんでしたので、漢字に関する知識はありませんでした。それだけに、「倭」というような文字を使われてもあまり感じることはなかったかもしれません。しかし、当時の日本人は、「わ」という自分たちの集団の「大和言葉」は全く曲げなかった。そのことは高く評価できるのではないのでしょうか。この時代から日本は「和」の国なんですね。

3 「日本」という名称と聖徳太子による対等外交

さて「和を以て貴しとなす」という十七条の憲法を作ったのが聖徳太子です。その聖徳太子が絡んで、もう一つ今の日本を示すものがあります。それが「日本」という名前です。もちろん、この「日本」という名前を聖徳太子が命名したわけではありません。しかし、聖徳太子が遣隋使を始めたときに、小野妹子が聖徳太子の手紙を持って行くのですが、その文面に「日出ずる処の天子、書を日没するところの天子に致す、つつがなきや云々」現代語でいえば「“日が昇る東の国の天子（天皇）が、日が沈む西の国の天子（皇帝）に手紙を送ります。お元気ですか？」と書いたのです。時の隋の皇帝は暴君として知られる煬帝

です。この話を聞いて当然に激怒します。「陽が昇る」要するに、これから発展する国の天皇が、「日が沈む」要するにこれから没落する国の皇帝に手紙を送ります、お元気ですか、というような文面である。これから自分が没落するかのような文面を送られて気持ちの良い皇帝などいるはずがありません。

一時、妹子は処罰されそうになりますが、このころ隋は高句麗への遠征で苦戦しており、「ここは高句麗の背後に位置する日本と手を結んだ方が得策」と、煬帝は友好姿勢をとることにしたのです。

また、妹子が公式な官位を持つ外交官であったことから、日本には整った官僚制度があり交渉が可能だと判断された部分もあるようでした。

翌年、隋の外交官が初めて飛鳥の地を踏み、朝廷で国書を読み上げ日本式の礼（4度お辞儀をする等）を執った。太子の「これからは対等な関係で行くのでヨロシク」という目論見は、ここに見事成就したんです。

もちろん、聖徳太子が、隋のこれらの事情まですべて知っていて、強気な手紙を書いたのであれば、本当にすごいのですが、さすがに高句麗と隋の関係までわかっていたとは思えません。しかし、結果論であっても聖徳太子の目論見はうまくゆくことになったんですね。

逆に、遣隋使を行うまでに冠位十二階や十七条の憲法を行っていたことが良かったという部分もあります。できることを先に行った聖徳太子の政治的な感覚が、隋と当時の日本の対等外交を成功させたということが言えるのではないのでしょうか。

さて、話は遣隋使にそれてしまいましたが、この聖徳太子が隋に差し出した「日出ずる処の天子」という言葉が「日本」という国号の元になっているというような考え方にもつながるのです。

ちなみに、日本国を「日本」と正式に中国の歴史書が書くようになったのは「新唐書」からであり、それまでは「日本」と「倭」が併用で使われていました。隋の煬帝がしぶしぶながらも、高句麗との関係があったために対等の外交を行い、そのことによって、中国の日本に対する態度は「対等な国」とするようになったのです。それは唐の時代から日本は大陸の大国と対等な国として扱われるようになったのです。その意味で、「対等な外交」を勝ち取った聖徳太子の外交、あるいはその運は、日本にとって非常に重要なことになり、日本が「日本」と呼称することにつながるのです。

まさに、日本の形と日本の名前を決めたのが聖徳太子なのかもしれませんね。

4 「和」という漢字があらわす「稲の神」

その聖徳太子が重要視した、「和」はどうやって生まれるのでしょうか。

そもそも「和」という漢字は「稲」を表す「のぎへん」と「口」という漢字でできています。要するに、同じ「稲」を口にするという意味が存在します。

大和言葉で「稲の神」のことを「さ」といいます。すでに一度この連載では申し上げてい

るので、復習しますと、稲の神様が「さ」ですね。そして高貴な方の座る場所を「くら」といいます。天皇陛下が座る場所を「たかみくら」といいますね。ですから、稲の神様が里に下りてきて座る場所が「さくら」です。そして、稲の神様の食べるものは、朝餉・夕餉などという言葉があるとおり、食事のことは「け」といいますので、「さけ」になります。そして稲の神様を扱う女性を「さ」の乙女、要するに「さおとめ」ということになります。

このように、「和」という漢字が示すものは、同じ「稲」を「口」にするということになります。これは、単純に「同じ釜の飯を食った」という同一の感覚ではなく、「稲」ということで「さ」を共有するということの意味するのではないのでしょうか。単純に言えば、「稲」を「口にする」のではなく、「同じ稲の神様を共有する」ということであり、それは、同じ神、そして同じ食習慣、同じ生活習慣を共有しているということになります。

日本では、その神が「女性」であることが注目される部分があります。日本に限らず、古代ペルシャいわゆる「肥沃な三角地帯」といわれたメソポタミア文明の各都市から、インド・中国・東南アジアを經由して日本に稲作が伝わっています。その稲作と同時に、「地母神信仰」が根付きました。その後ペルシャはイスラム教になり一神教がスタートしてしまいますし、中国とインドは仏教に帰依することになります。しかし、日本はその時の稲神信仰が残っているということになります。

では「地母神信仰」とはいったいなんでしょうか。

まさに、「無から有を生む」ものは「神」であるということから、作物を作り出す土地、そして子供を産む母にいずれも神がいるというような信仰が存在することになります。日本の古墳などに埋葬されている「土偶」があります。「土偶」はいずれもふくよかな女性の形をしています。これは、物を生み出す「母」を形にしたものです。神をかたどる人形を作ることで、農作物の豊作を祈るようにしたのです。

ですから、先ほどお話ししましたが、稲を扱う女性を「さおとめ」といいます。しかし、なぜか男性の記述はありません。「さおとめ」は女性であるというのは、女性は、日本の古事記の記述から考えれば「黄泉の国」につながっていて、その黄泉の国は「新しい命を生む力」があることから、稲を「生む」こと「育てる」ことに神の力を借りるという意味で、女性が稲の神を扱うのです。具体的には「さおとめ」の一つの漢字が「五月女」というように五月の田植を行うのが女性なのです。

そして、日本においては、それらの上位の存在で「天照大御神」、ようするに太陽の神がいます。この天照大御神も『女性』なのです。

5 日本人の『女性』と『天照大御神』にみる神の意識

日本の宗教は多神教です。そして実は女性を中心にする神の意識があります。

日本人において、「宮」という漢字は、神の国とのつながりを示します。皇族を「宮」と

つけるのは、天照大御神の子孫である天皇家、要するに神々の子孫との血縁を示しています。一方、神社においても、直接的に神の国とのつながりがある上級の神社を「神宮」といいます。一方、様々な神社の頂点に立つ神社を「大社」、普通の神社を「神社」そして、たまに神が訪れる場所を「祠」といいますね。ですから「宮」という単語は、日本人にとっては非常に大きな意味のある漢字になります。

さて、人間の器官で「宮」がついているのは「子宮」要するに、女性の子供を宿す部分だけです。女性には、「宮」が存在しています。もちろん男性には「神の国とのつながり」がありません。この器官の名前の付け方が、日本人の女性の持つ新たな命を生み出す力に対する畏敬の念と、女性の神の国とのつながりを示しているのです。もちろん、日本には「男尊女卑」の考え方があるというような感じもあります。それは江戸時代以降の儒教の影響であり、古代日本の間は、「男尊女卑」ではなく、「女性上位」の内心と「男性を中心にする社会」という建前で成立していたのです。この「本音」と「建て前」の最もよく表れたのが平安時代の「通い婚」ですね。通い婚というと、女性が男性を待っているイメージがありますが、それは相手が「モテる」男性であるからにほかならず、モテない男性は、通い婚であっても、家の中に上げてくれるような女性がいなかったということになるのです。

男性は、女性の新しい命を生む力に畏敬の念を持つようになります。そのために、恐ろしい場所、あるいは険しい場所などなかなか近づけない場所、それでも多くの恵みを与える場所を「女性の神」として祀るようになります。「山の神」などというのは、今でも怖い奥様に使う場合がありますが、様々な恵みがあり、また、薪も動物も様々な恵みがある、それでも山には危険が多く遭難する場合があります。そのような場所を「女性の神」がいると信じていたんです。男性が入ると、女性の神が微笑みかけてくれたり、あるいは、女性の神があまりにも男性を気に入りすぎて「取り込む」、要するに遭難してしまったりするのです。

同じように海の神も「女性」ですね。浦島太郎でおなじみの「竜宮城」の主は「乙姫」です。古事記の中でも「海神・綿津見神」の娘豊玉姫神が山幸彦（火遠理命）と結婚し、鵜茅不合葺命を生むのです。しかし、その後海の神である豊玉姫命は、出産のときに龍に化身したところを見られたことから、海に帰ってしまいます。この鵜茅不合葺命と玉依姫神との間にできた子供が神倭伊波禮毘古命、後の神武天皇になるのです。

このように、日本人は女性を「畏敬の対象」として見ていました。そして、その神を中心に和をもつことによって、一つの地縁的なつながりを持ち、「国」を形成していったのです。そして、その神々の中心にいるのが「天照大御神」まさに、太陽の神であり万物を育てる恵みの神ということになります。

日本人は、このように「女性」をうまく取り入れ、その中で「和」を実践するということになります。そして、その「和」の力を以て、自然と共存し、場合によっては自然を開拓し、そして悪天候と戦って、自分たちが生き抜く知恵を持ってきたのです。

ワールドカップのサッカーですが、当然に、日本人が「サポーターも一緒になって」ということが挙げられます。その一体感が最も大きな力になるというのは、あながち間違えた話

ではありません。「和」の力を実践してこそ、日本人の最も大きな力を出すことができる、それこそが日本の力であり、いま日本人に最も必要な力なのではないでしょうか。そして、その力を得るために、日本は「多神教」とも言われる日本の神々の系譜を現代まで捨てることなく、しっかりと伝統を守ってきているのです。

そして、世界が称賛する日本の秩序も、そして世界が驚愕するような日本の団結力も、無意識のうちにあるこの神の意識が、「スポーツマンシップ」と名前を変えて息づいている証拠ではないでしょうか。